

# 国語科におけるアクティブラーニングの実際

近藤 奈央（戸坂小学校） 望月 真（比治山大学）

戸坂中学校区小・中連携教育研究会 国語科部会においては、研究テーマ「自尊感情を育む授業の創造」～わかる・できる喜びを感じることができる授業づくりをとおして～を受け、戸坂小学校第6学年2組において、自分たちの未来の町をプレゼンテーションしよう『町の幸福論』—コミュニティデザインを考える」の研究授業を公開した。

## 1 国語科におけるアクティブラーニングについて

### (1) 学習サイクル

学習活動のプロセスとして、学習サイクルの6つのステップが示されている。

動機づけ — 方向づけ — 内化 — 外化 — 批評 — コントロール

学習者は、指導者から示される問題（めあて）を既存の知識や経験との間で生じるコンフリクト（対立）を学習の動機づけとして問題の解決を始める（方向づけ）。これを国語科授業にあてはめると、めあての提示＝動機づけ、言語活動の設定＝方向づけとなる。次のステップとして、問題解決のための知識を習得して思考する（内化）。思考の結果に基づいてコンフリクトの解決（外化）を試みる。外化のプロセスの中で他の学習者からの意見を受け（批評）、学習者は自らの考えを修正（コントロール）させる。（松下 2015 より一部引用）

### (2) 協同学習

協同学習における話し合いの技法として、国語科授業では、思考・ペア・シェア（溝上 2014）が一般的に用いられている。(1)の学習サイクルの中で内化（思考）させた後、考えを交流（ペア）させる。このことによって自分の考えの最初の外化を行うことになる。つまり、この技法を用いることによって、学級全体の場での外化の前にペアによる、外化—批評—コントロールを行うこととなる。こうすることによって、全体の場での外化に参加する意識を高め、聞き手にとってもわかりやすい内容となることが期待できる。

### (3) 論理的コミュニケーション

学習サイクルの中の外化において、学習者相互のコミュニケーションが図られることとなる。これまでの国語科授業においては、同意（賛成）、反意（反対）の立場で話し合いがなされることはあったが、話し合いの方法を具体的に指導する必要がある。

次の図はよく知られた三角ロジックである。



この図を国語科授業にあてはめれば、データは本文中の記述（本時は写真）となる。データに対して自分なりの理由（考え）を説明して主張することとなる。学習者が互いの考えをシェアする中で、他者の理由（考え）に対して自分の考えを述べさせる（批評）ことによって自らの考えの修正（コントロール）がなされることになる。

これらのポイントをふまえて、近藤（戸坂小）が授業実践を試みることとなった。

## 2 学習指導案

紙面の都合で、本時の目標（第5時）と学習展開のみを掲載する。

**本時の目標**：文章の内容を読み取るとともに、図表などの資料の用いられ方とその効果を確認することができる。

**学習展開**：（全13時間 本時 5 / 13）

学習活動	指導上の留意事項	評価規準・評価方法
1 前時を振り返る。	○ 筆者の主張を確認する。	
2 めあてをもつ。	○ 土祭を指導者が音読し、プレゼンテーションをするつもりで読むことを伝え、本時の見通しを持たせる。	
<b>《本時のめあて》</b> 土祭の様子がよく分かる写真を選ぼう。		
3 どんな写真を用いればよいか考える。	○ 形式段落⑦と写真が入ったものを配布し、どんな写真が効果的か考える。	
4 筆者がどんな意図で写真を活用しているか捉え、話し合う。	○ 教科書の本文に載っている写真を見て、筆者がその写真を用いた意図を考える。	
5 効果的な写真の使い方についてまとめる。	○ 用いられている写真の効果やよさについてまとめる。	◎ 効果的な資料の活用の仕方考えることができる。 《ワークシート・発言》

## 3 授業の実際

紙面の都合で学習活動3における学習者の発言を一部掲載することにする。ここは「思考・ペア・シェア」のプロセスを経て学習リーダーが発言している場面である。

C1：「私たちの班は①と③と④の写真について話し合い、①を選びました。理由は③と④は筆者の主張よりも焼き物が強調されているからです。①の写真は人々の協力が強調されていたので①の写真にしました。」

C2：「②と④で迷いました。②は町の人が団結して物を売ったりしているからです。④は町の人と訪れた人が交流しているかもわからないので迷っています。」

## 4 成果と課題

3の学習者が個人思考から班での集団思考を経て発表している場面である。下線部分では論理的コミュニケーションが成立している。今後の課題としては、学習者自身が課題を設定できるなど、さらなるアクティブラーニングが期待されよう。

《引用・参考文献》

松下佳代 編著（2015）「ディープ・アクティブラーニング」 勁草書房

溝上慎一（2014）「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」 東信堂